

アイヌ・ネノアン・アイヌ

アイヌ語では雪のことを「ウバシ」という。ウは互いに、バシは走るの意味だ。小さい雪は早く、大きい雪はふわふわと落ちてくる。競争しているように見えるからウバシなのだろう。美しい表現だ。

アイヌという言葉は、人間を意味する。アイヌ・ネノアン・アイヌといえば「人間らしくある人間」のことで、昔、アイヌの子どもたちは、アイヌ・ネノアン・アイヌであるようにと言われて育った、という話を聞いた。この言葉もいい。ウエペケレ(昔話)にこんな表現がある。ヤクサクノ カントオロワ アランケブ シネプ カ イサム「役割なくして、天から降ろされたものはひとつもない」という意味だそうだ。かつて、テレビで毛沢東(もうたくとう)の農業政策の失敗例として、スズメの大量駆除(たいりょうくじょ)を紹介していた。米を食いあらずからと、一網打尽(いちもうだじん)にしたら、虫害の方がもっとひどかった、と。アイヌにとってはスズメもアマメチカッポカムイ「穀物を食べる神」。スズメを大切にした娘がスズメに命を救われたというウエペケレ(昔話)があるという、この話は「だからスズメにも穀物を分けてやりなさい」という言葉で終わっているそうだ。

アイヌの社会では昔からこういわれてきたそうだ。「相手の言い分に十分に耳をかたむけ、きちんと話ができるようにと、カムイは人間に二つの耳と一枚の舌を与えた。その舌がつむぎだす言葉は、どんなに切れる刀や猛毒を塗った矢より強い」と。相手が人間であれ神であれ、互いに理解し合うためには、その心をゆりうごかす言葉が必要であるという。

アイヌ語で「こんにちは」は、イランカラプテー「あなたの心にそっとふれさせていただきます」という意味だそうだ。この言葉も美しい。

先日、生徒会の朝の挨拶運動が実施された。あなたは、心をゆりうごかすあいさつができただろうか。